

当院不妊治療外来で妊娠出産した症例の分娩時合併症の詳細

医療法人社団 徐クリニック ARTセンター

徐 東舜 清須 知栄子 伊藤 真理 峰 千尋 中塚 愛

【目的】体外受精での分娩時の母体側に出血量が多くなるという報告がみられる。その詳細は不明な点も多い。今回我々は、移植方法別に出産時の出血量を増加させる合併症の発症頻度に差がみられるかどうかを検討した。

【方法と対象】当院不妊外来で2015-2017年に体外受精で妊娠し単胎出産した症例に対し、分娩院へ分娩時合併症に関するアンケートを行い、そのアンケート結果を取りまとめた。新鮮胚移植、自然周期の融解胚移植、ホルモン補充周期の融解胚移植で妊娠分娩した症例それぞれを対象とし、一般不妊治療での分娩症例を比較対象とした。今回の検討項目は、前置胎盤（低置胎盤を含む）、癒着胎盤、胎盤早期剥離、1000ml以上の出血、輸血の有無の5項目である。

【結果】分娩院からのアンケートの回収数は771で、回収率は91.5% (771/843)であった。新鮮胚移植(29例) vs 自然周期の融解胚移植(168例) vs ホルモン補充周期の融解胚移植(261例) vs 一般不妊治療(313例)をそれぞれの発症率で比較すると

前置胎盤では、10.3% vs 3.6% vs 2.7% vs 0.6%

癒着胎盤では、0% vs 0.6% vs 3.4% vs 0.3%

胎盤早期剥離では、0% vs 0% vs 0.8% vs 0%

1000ml以上の出血では、3.4% vs 1.8% vs 18.4% vs 1.6%

輸血の有無では、0% vs 0.6% vs 3.4% vs 0.3%

となった。移植方法間で比較するとホルモン補充周期の融解胚移植は自然周期の融解胚移植と新鮮胚移植に比べ1000ml以上の出血の発症率が有意に高かった。輸血や癒着胎盤に関してもホルモン補充周期の融解胚移植は、その他と比べると有意ではないが高めの発症率になっている。一般不妊治療と比べるとホルモン補充周期の融解胚移植のみが癒着胎盤、1000ml以上の出血、輸血の有無の項目で有意に発症率の上昇を認めた。【結語】ホルモン補充周期の移植は、他の方法と比較すると出血のリスクが高い。可能な限り凍結融解胚移植は、自然周期にすることが望まれる。